



5月24日午前8時15分
最大波高5.5メートル
町が消えた



←津波で本社工場が全滅したにもかかわらず、ガリ版刷りで発行した地元紙「城洋新聞」(5月27日付け、被害第一報)



「ゴロゴロとした海底が見えた。橋のような波に追いかけて逃げて。」

佐藤さん 私が最初に気づいたのは朝の四時頃。寝ている時、ザワザワと音がしたので、窓を開けてみると、八幡川から水があふれてきていた。ランドセルを背負い、家族で避難し、少したってからサイレンが鳴りました。八幡橋の上まで来た時、川底が見えてきた。汐見橋に橋のような波が押し寄せてきたのを確認しながら、一目散に避難した。そして小学校の高台にたどり着いたと同時に、グラウンドにも水が押し寄せ、そして危機一髪だったんです。その時、母がみんなと離れてしまい、どうしようという心配と、津波の恐ろしさで気が動転したのを覚えています。高台から、自分の家が見える。平和に暮らしていたのに、津波がだんだんと押し寄せてきて、自分の家が水に浸かっていくのを見て、子どもながらに寂しいというか悲しいというか、当時の写真を見るのは今でも嫌ですね。涙が出てきます。



家庭で語り伝えること、聞く機会を提供すること。志津川町から防災意識の大切さを発信したい。

垣入 佐藤秀昭さん (現交通指導隊副隊長/昭和23年生まれ)

手を引っ張られて避難しました。土の底がムクムクと泡を吹き、入道雲が湧くような感じになって、周りの田んぼは、あつという間に湖になったのを覚えていいます。



阿部さん 私は、刺し網漁に出ていました。十隻ぐらいが海上にいました。午前三時二十分頃、荒島の突端辺りに行くと、波もなく海面は鏡のよう。舵を取り、真っ直ぐに進もうとするが船が蛇行する。潮が異常だ、こりゃあ、大した津波だなと思っただ。「異常な引き潮 津波の用心だ」だったので。漁師の私たちは、そういう時は岸に着く、海上ならば深みにいろと親たちから教えられてきました。五時頃、サイレンが鳴った時には、すっかり湾内の底が見えた。今まで見たこともない地獄絵図でした。船は潮に流され、どこを走っても岩場の間を走っているようなものでした。津波がおさまって漁港に戻ったのが午後一時半頃。町には家が全然ない。ああ、これはダメだと思いました。布団やタンス、工場の大大きな屋根瓦までもが、みんな海に流されてきている。これまで、十勝沖地震なども経験していますが、あんなにすごい津波は初めてでした。

子どもを背負い、着の身着のまま逃げた。荒島がすっぽり水の中に入っていき光景は忘れられない。本浜町 三浦牧子さん (現本浜行政区婦人防火クラブ会長/昭和9年生まれ)



防災訓練は、いざという時の下準備。自分はどうすればよいのか、訓練で身に付けてほしい。

上の山 芳賀春夫さん (元消防団団長/昭和5年生まれ)

被害を少しでも取り戻そうと、助け合った。一生懸命に手伝った。

三浦牧さん 本浜の私たちは十日から二週間ほど、高校の講堂に避難していました。食べるものがないと子どもが泣くので、お菓子屋さんからパンをもらったり、炊き出しをこそうになりながら避難所で寝起きしました。芳賀さん 被災後すぐに、自衛隊の人たちが来てくれて、まずは道路に積もったゴミを撤去してくれ、道路は確保されましたよ。

三浦(と)さん 当時私は青年団の会員でした。家にあつたジョウロをみんなで持ち寄って、消毒して歩きました。佐藤さん 小学六年生だった私は、家の商売道具などすべて塩水に浸かったからと、部品や工具などサビついた物を、灯油で何日も何日も磨かれました。被害を少しでも取り戻そうと、子供ながらに一生懸命に

44年目の証言——いま語る「チリ地震津波」1960(昭和35)

手伝いました。三浦(牧)さん 当時は川がきれいでしたから、川に浸かって、家財道具一切合財を懸命になって洗いました。そして、屋根の上に干して…。物資などが来るまで、しばらく時間がかりましたよ。

阿部さん 漁ができるようになったのは、一カ月後くらいから。海が荒れたので、すぐには何も獲れませんでした。高台に住む人たちが峠を越えて、家の片付けなどに来てくれた。今で言うボランティアですが、その人情は、とてもありがたかった。

経験をお伝えに聞いていたことが役に立った。訓練を通して防災意識が強くなった。

三浦(牧)さん 災害後、大きく変わったことといえば、一番は防災無線受信機が各家庭に取り付けられたこと。また、町の九十五%が区画整理され、道路が拡張されて道幅が広がったことですね。

阿部さん 海では、災害時の伝達方法を充実させようと赤灯を付けてもらいました。今は動力船だから、サイレンが鳴っても聞こえない。夜でも、声が届かない場所でも、赤灯があれば安心です。また私の場合は、親父たちが経験したことを口伝に聞いていたことが、災害時にはだいぶ役に立ちましたね。息子や孫にも、話して聞かせています。

佐藤さん 津波経験のない若い世代が多くなり、防災訓練に自主的に参加する人が減ってきています。特に中学生や高校生は、話を聞く機会も少ないようです。懇談会を開いたり、映像なども使って伝えたりする機会を作っていくかなければなりませんよ。

芳賀さん 全国的には九月一日が防災の日ですが、志津川町では四十年以上にわたって、



船がいつ岸に打ち上げられて終わりになるか。でも、なんとしても生きなければ。思い出すと胸がせつなくなる。

大森町 阿部徳助さん (元消防団副団長/昭和3年生まれ)

津波記念日の五月二十四日に行政区単位の自主防災訓練を行っています。まずは自分が自分の身を守るといふ気持ちで、普段から持っていることが大切ですね。三浦(牧)さん 地域ごとに声をかけ合うこと。隣近所には独居老人も多いので、そういう人たちに声をかける、助け合う気持ちも大切です。訓練ではそういうことも覚えるわけですから、ぜひ参加してほしいですね。

芳賀さん 地震や津波、山火事が起きたとき、情報の連絡や医療、食糧の物流をどうするか、高規格道路の整備なども必要になってきます。そういったことを今から準備し、考えておくことが大切です。

三浦(と)さん 志津川町では、町をあげて行う防災訓練に、かなり多くの人が参加していますから、防災意識は強い方だと思えます。良いことに、志津川町は一声でパツと人が集まります。防災意識が町のすみずみにまで広がり、何があっても即行動に移せる体制をつくっていききたいですね。



4年を費やした復興への道。強く団結した町民。生まれ変わった町。

